

論文の内容の要旨

氏名：秋元優季

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：ジョルジュ・ド・ラ・トゥールによる「マグダラのマリア」について—オイルランプの象徴的意味

序章 ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの忘却と再発見に関する一考察

ジョルジュ・ド・ラ・トゥール（1593-1652）は17世紀前半にフランス北東部、ロレーヌ地方で活動した画家である。この画家は、死後長らく忘れ去られており、20世紀になってドイツの美術史家フォス（1915）により再発見されたことは美術史上有名である。序章では、忘却の期間のラ・トゥールおよび彼の作品に関する記録を辿る。また、この画家がなぜ忘却されたのかという問いに対して、ラ・トゥールに関するパリでの評価という視点から知見を提示する。ラ・トゥールは1639年に6週間パリに赴いている。ルイ13世が作品が賞賛したという記録が残る一方で、17世紀のパリの美術コレクターの目録を精査すると、ラ・トゥール作品の値段が他の同時代の画家に比べて著しく低いことが解る。当時のパリではイタリア趣味が主流であり、イタリアの画家やイタリアで十分に経験を積んだフランスの画家の作品が高評価を獲得していた。ラ・トゥールの作品は北方の伝統が色濃く流入していることが、低評価の要因となっていたのではないかと考えられる。したがって、すでに生前から忘却の下地ができあがっていたと考えられる。また、パリでの低評価が画家とイタリアの隔たりを示すと考えることも可能であり、ながら議論されている画家のイタリア修業の有無に関しても新たな視点から光を当てることになる。

第1章 ラ・トゥールによる作品群「マグダラのマリア」

現存するラ・トゥールによる5点の「マグダラのマリア」に関する基本情報と先行研究を確認する。ラ・トゥール作品のほとんどは年記が入っておらず、作品に関する記録も乏しいことから、制作年代が常に議論的となる。5点現存する「マグダラのマリア」もその例外ではなく、各作品の制作年代や描かれた順番に関しては各研究者で意見が分かれている。ラ・トゥールのような画家を研究するにあたり、制作年代を特定するための基本的な方法論について、ロスキルが論じる内容を紹介する。

また、ラ・トゥールによる「マグダラのマリア」の内容に関する先行研究では、アデマール（1972）が、ナンシーの女子修道院のために描かれた、2点のマグダラのマリアと《蚤をとる女》が、この修道院に関わる女性の階層を反映していると論じている。マクリントック（2003）は5点のマグダラのマリアを聖女の各精神段階に対応させている。つまり先行研究においては、各作品同士を相互に関係したものと捉え、同時に解釈しようとする憾みがある。また、ラ・トゥール個人やロレーヌ地方に特有の図像として解釈される傾向にある。このような状況に鑑み、本論文においては、ラ・トゥールの「マグダラのマリア」を同時代作品の中に位置づけることを出発点とする。

第2章 カトリック改革と美術—悔悛する聖人図像の成立過程

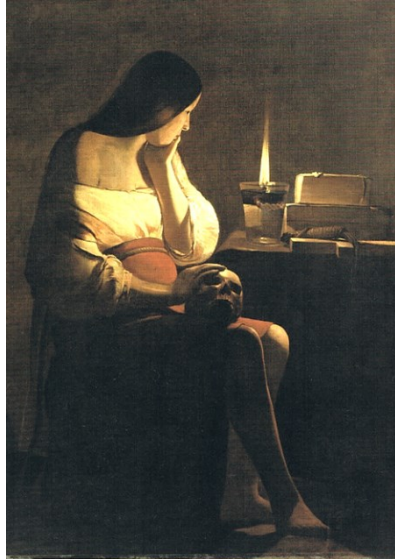
ラ・トゥールの時代にマグダラのマリアを扱った図像が頻出する宗教的背景を探る。カトリック改革期においては、とりわけプロテスタントからのさまざまな批判によって、宗教美術制作は逆により一層活性化した。本章では、マグダラのマリアと関係が深い「悔悛の秘跡」と、聖画像崇拜の問題について取り上げる。プロテスタントにより正当性が問題視された教義のひとつである「悔悛の秘跡」を擁護する過程で、悔悛の実例を示すため何名かの聖人が拔擢され、彼らは徐々に文学や美術作品の中で表象されるようになる。聖ペテロや、ダヴィデ、放蕩息子などがその例である。そして、マグダラのマリアも彼らとともに、「悔悛の秘跡」の正当性をアピールするために駆り出された聖人のひとりである。

第3章 17世紀におけるマグダラのマリア図像の成立と展開

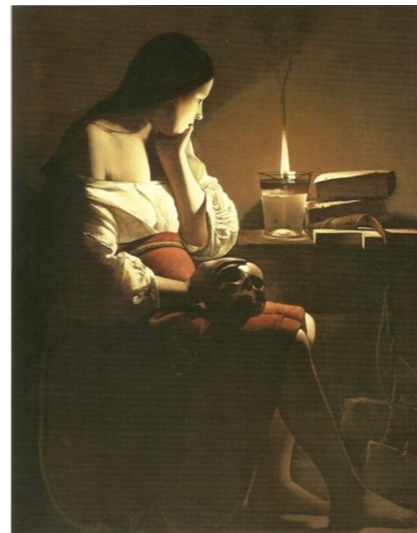
悔悛の象徴としてのマグダラのマリアは、さまざまな伝承や福音書の恣意的な解釈により誕生したものである。福音書に「マグダラのマリア」という女性が登場する場面は少ない。福音書中のほかの2人の女性と統合する形で、「悔い改めた娼婦」という経歴を付された聖女が誕生したのである。つまり、悔悛の象徴としてのマグダラのマリアの神学的正当性は、非常に危ういものであった。この問題に関して、バロニウスは『教会年代記』（1636）のなかで、3人の女性を同一視する解釈の正当性を説き、キリストの死後は

マルセイユに渡り隠遁生活を送ったことを正当な歴史として記載した。この書物はルター派の教会史に反駁する意図をもって著されたものである、さまざまな事柄に関して考古学的に検証し初期キリスト教との正当な結びつきを証明している。

このような歴史的な事情を背景にして成立したマグダラのマリアの図像は、「世俗世界との決別」の場面を描いた作品と「悔悛」の場面を描いた作品に大別することができる。ラ・トゥールの作品に関しては、ニューヨーク、メトロポリタン美術館に所蔵される作品が前者に、ルーヴル美術館と、ロサンジェルス、カウンティ美術館に所蔵される同一構図の作品が後者に分類できる(図版 1,2)。その他の作品に関しては、モチーフの寡少さや、組み合わせの異質さから、同時代の表現形式に分類することは困難である。



図版 1.
G・ド・ラ・トゥール
《灯火の前のマグダラのマリア》
パリ、ルーヴル美術館



図版 2
G・ド・ラ・トゥール
《ゆれる炎のあるマグダラのマリア》
ロサンジェルス、カウンティ美術館

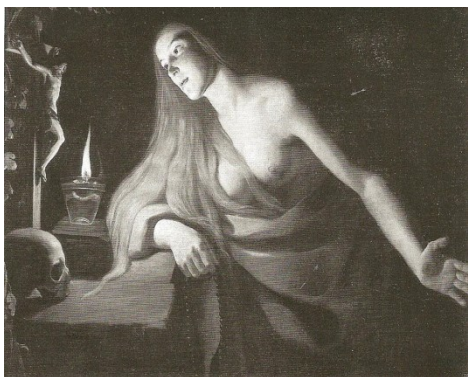
第4章 ラ・トゥールの「マグダラのマリア」における照明—オイルランプの象徴的意味

ラ・トゥールは画家生活の後半に数多く描いた「夜の情景」において、複数の照明器具を挿入している。ショネ(1996)は蝋燭やランプの多義的な意味を紹介しているが、それらの意味が同時代の作品にどのように反映しているかの調査が見過ごされており、ラ・トゥール作品の照明について明言を避けている。ラ・トゥールが描いた「夜の情景」のなかで最も頻繁に登場するのは蝋燭である。一方で、オイルランプを光源に採用しているのは数ある作品の中で「マグダラのマリア」に限られている。そのなかでもオイルランプが描かれているのは、ルーヴルおよびロサンジェルスに所蔵される同一構図のマグダラのマリアである(図版 1,2)。メトロポリタン美術館に所蔵される作品には蝋燭が描かれているが、この作品はランプが描かれたルーヴルとロサンジェルスの作品とは、聖女の置かれた段階が異なる。つまり、ラ・トゥールは「悔悛」の状態にある聖女に限定し、オイルランプを光源に採用している。

同時代の作例を概観すると「悔悛」の状態にあるマグダラのマリアとオイルランプが結びついた作例は、ラ・トゥールに限られたことではない。ラ・トゥールに先立ちロレーヌで活動していたベランジュや、カラヴァッジェスキの画家であるセーヘルやビゴラの作例がそれを証明している(図版 3)。つまり、オイルランプを伴った悔悛するマグダラを描いた図像は、作例は数多くはないがこの時代の類型として捉えることができる。では、これらの作品の中で一番後に描かれたラ・トゥールの作品は、単に先行作品を踏襲した結果なのだろうか。ラ・トゥールの作品は、ランプを画面の中央に配し、ひと際大きく描いている。また、先行作品が聖女の視線の先に十字架を配しているのに対し、ラ・トゥールが描くマグダラのマリアはランプの炎を見つめており、聖女とランプの関係がより緊密に描かれている点の特異である。

一方で、寓意図像集において「灯された炎」はさまざまな意味を担っているが、それが蝋燭の炎なのかランプの炎なのかは常に明確に区別されているわけではない。しかし、ランプの中で燃える炎特有の意味が存在する。オイルランプはマタイ福音書に登場する「10人の乙女の譬話」に登場する道具であり、美術作品においては彼女たちのアトリビュートとして描かれる(図版 4)。4世紀、ポワティエの司教ヒラリウ

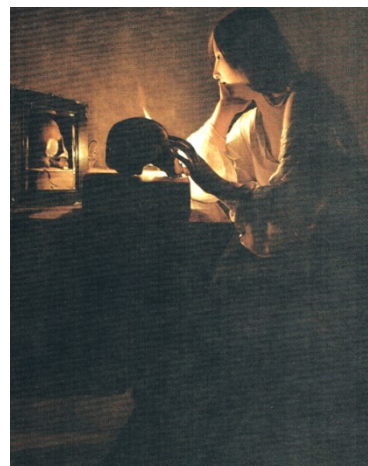
スによる『マタイ福音書注釈』の中でのランプの解釈が、後の時代まで受け継がれているのである。ヒラリウスは、ランプの器は人間の身体であり、油は、善きわざの結実、ランプの中で燃える炎は秀でた心のありようであると解釈している。リーパ著『イコノロギア』(1603) やラ・トゥールの時代ロレーヌで繰り広げられていた説教においても同様の意味を与えられたランプが登場する。ラ・トゥールが、特定の構図の中で、マグダラのマリアにのみオイルランプを描いたことの根拠もこの点にあり、ランプは聖女の内面に灯された信仰の光を象徴するのである。



図版 3
T・ピゴー、《悔悛のマグダラのマリア》
プエルトリコ、ボンセ美術館



図版 4
M・ショーンガウアー
《賢いおとめ》



図版 5
G・ド・ラ・トゥール
《鏡の前のマグダラのマリア》
ワシントン、ナショナル・ギャラリー

結論

本論文では、ラ・トゥールが描いた「マグダラのマリア」について、同時代作品との関係性を重視し、横断的な目線での研究に取り組んだ。その結果、オイルランプが描かれた 2 作品について、照明器具の選択において中世以来の伝統が流入していることが明らかになった。17 世紀前半の人口照明を伴う夜景画は、カラヴァッジョに端を発する、光が画面にもたらす効果への関心から展開した様式である。無論、それ以前に夜を描いた作品は存在するが、カラヴァッジョの前と後の夜景画では、照明器具や光に関する表現への拘泥が異なる。秘跡の正当性を示すことを目的に成立した図像が、カラヴァッジスムという様式的動向と重なり、さらに中世以来継承されてきたオイルランプの伝統的意味が融合し、神秘的な作品が生み出された。その最たる例がラ・トゥールであると言える。

また、ラ・トゥールが描いた「マグダラのマリア」の作品群の中には、照明器具を巧みに隠してしまい、特定されることを妨げている作例がある(図版 5)。他の同時代の画家の作品を見渡しても、このような表現は確認できず、ラ・トゥールに特有の手法なのである。この謎めいた表現がどのような意味を持つのかは、未だ非常に漠然とした推測の域を出ず、今後の課題である。しかし、聖女を描いた一連の作品群においては、照明器具やその見せ方がとりわけ重要な意味を担っていたことは明らかだろう。